NISHIJIN

特集3

デザインする街—4

京町家を活かすまちづくり〈京都・西陣〉

京都人は古いものを大切にし、守っていきたいという意識が強い。“京町家は京都の文化、日本の文化”と位置づけ、伝統的な良さを活かしながら、町家を守ろうという動きがある。住民意識が高いのだ。職人のまち“西陣”でも、長い歴史の推移の中で、変貌を余儀なくされたが、西陣織を織り出した町家は、なお健在である。今号は、京都西陣における代表的なまちづくりの活動を紹介しよう。地元力で展開する、地に足のついた“まちづくり”である。

紋屋町・三上家路地

《京町家を活かすまちづくり》本論

京町家の保全・再生への取り組みについて

奥 美里
MISATO OKU

おく・みさと——（財）京都市景観・まちづくりセンター 事務局次長／京都大学工学部建築学科大学院修了。同年、京都市役所に建築技術職として採用。住宅計画部門、営繕部門、建築指導部門を経て、2004年より現職。

NISHIJIN

1997年に設立された（財）京都市景観・まちづくりセンター（以下センター）は、京都らしい景観の保全と創造、質の高い住環境の形成を目的にした、住民によるまちづくり活動を支援している公益法人です。その役割は、中立的な立場から、地域の住民、事業者、行政の間を橋渡しし、まちづくり活動の協働を推進することにあります。ここでは、センター事業の核である、京町家の保全・再生を支援する考え方と取り組みの具体例を紹介したいと思います。

センターは、まちづくり活動に関する支援、情報発信、交流、調査研究等の広範囲な事業を行っています。地域に根差した“まちづくり”の実践と、地域の価値ある“景観”をつくることを相互に一体のものとして推進していくためです。なかでも特に、人々の“暮らし”の場でもある京町家の保全・再生を支援することは、この相互のかかわりの大切さを学ぶ機会を住民の方々と共有することになり、それが京都固有の“景観・まちづくり”に直結すると考えるからです。京町家の魅力は、一般には、その街路空間を演出する洗練されたファサードや、自然を内部に取り込むインテリア空間の工夫など、建物というハードな面に注目が向けられます。しかし、その本来の魅力は、京都という風土が長い年月をかけて生み出し、洗練してきた暮らしの型として、まちに住むことの知恵や文化を結晶化させていることにあると思います。その意味で京町家は単なるハードとしての建物ではなく、文化の継承を担った多様で豊かなソフト群の素晴らしい結晶であり、それらを読み解くための手掛かりでもあるのです。新しい文化の創造には、この知恵と文化を内側から読み解くことが不可避なことと思われます。そのためにも町家という建物で、日々の営みが現実に生き生きとなされていなければなりません。センターは、京町家を支援することで、この結晶を読み解く生きた時間が多くの人々によって共有されることを目指しています。

昨今の町家ブームにのって、京町家を活用したお洒落なレストランやショップが急増している一方で、建物の老朽化、耐震・防火への不安、また維持・管理面での負担の増加、相続の問題など、多くの課題を抱えたままの住居としての個々の町家は、あまりにも簡単に、短時間で取り壊され、集合としての町並みも今や急速に京都から消滅しつつある危機的な状況です。この状況を克服するには、性急に結果を出すことを求める効率優先の経済行為と、知恵や文化を読み解くという時間のかかる行為を、仲介する橋渡しの媒体が必要なのです。センターはこのことを自覚し、さまざまな取り組みを通して、保全・再生のシステムを定着させていきたいと考えています。

1.京町家の保全・再生のネットワークづくり

京町家の保全・再生には、早い時期から多くの市民活動団体が、さまざまな視点から活発な活動を展開してきましたが、近年では職能団体や企業もその職能や立場を活かしてユニークな取り組みを始めています。センターは、それぞれの主体的な取り組みを尊重しながら、それらが住民や行政も含めての大きなネットワークになって連携するように取り組んできました。

まず、京都市とセンターでは、1998年、京町家が集積する都心の地域で、市民活動団体や職能団体、学識者等ボランティアの協力を得て京町家悉皆（しっかい）調査を行い約28,000軒の町家を確認しましたが、この協力体制がネットワークの始まりでした。この調査を受けて、2000年に京都市が作成した「京町家再生プラン」に基づき、センターでは、町家の所有者、居住者を始め、専門家、企業、市民活動団体、行政等多くの関係者とのネットワークのもと、さまざまな事業に取り組んできました。所有者や居住者を対象とした相談事業や京町家再生セミナーの開催を通して、町家を継承していく上での悩みについて建築や不動産にかかわる専門家がアドバイスをしたり、市民活動団体や職能団体等からの専門的な情報を提供する仕組みの整備、また、ニュースレターでの活動の紹介やシンポジウムの開催等、幅広く市民に向けて情報発信等を行う事業です。ここでの多様な専門家の知恵の連携は、町家への認識の幅を大きくしました。そして2004年には、京町家の追跡調査を行い、7年間で“町家が13%消滅”という厳しい現実を確認しました。その危機感から、市民活動団体、職能団体、行政等の連携のもと、京町家再生プランの見直しに向けて「今後の京町家の保全・再生のあり方検討会」を発足させ、特に“町家の活用手法”や“町家の耐震・防火”を緊急課題とした検討を始めると同時に、センター内に各団体等の紹介や最新情報を市民に身近なものとして発信、紹介するための「京町家情報コーナー」（常設）を開設しました。更に最近では、不動産関係の事業者団体が実施した「京町家不動産証券化事業」[＊1]の支援にも取り組みました。1軒の京町家の保全・再生を検討するだけでも、そこには社会が直面しているあらゆる問題がかかわっており、多くの関係者との時間をかけた協同作業なしに成果を上げることは不可能になっています。この協同作業に参加して共有する時間こそ、京町家の持つ知恵や文化を読み解き、伝承する場であると思います。センターは、そのような協同の場を積極的につくり、更に充実した支援ネットワークのシステムをつくり上げていきたいと考えています。

京町家再生セミナー風景　西陣に拠点をおく、関西木造住文化研究会（カース）の京町家で開催された京町家再生セミナーの様子。カースは、伝統木造住宅の防火・耐震性能向上手法の先端的研究の成果を市民やさまざまな方への公開講座等を通して情報発信したり調査研究事業を行っている市民活動団体

京町家情報コーナー（センター内）

2.「京町家まちづくりファンド」（基金）の設立による経済的支援

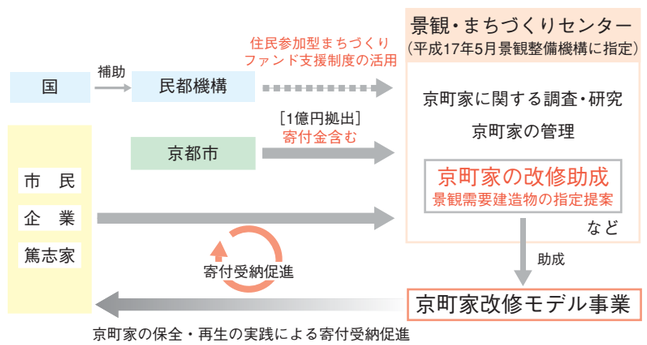
一方、町家は私有財産ですが、所有する方の多くがその維持・管理面に経済的な不安を抱えており、そのことが町家の維持を不可能にしている大きな要因の一つであることが、2004年の調査で分かりました。それを受けて、維持・管理を経済的な面からも支援し、その支援の成果を人々の目に見える“もの”として示すことで、今後の京町家の保全・再生の展開を現実的なものにしていく必要が認識されました。東京在住の篤志家から「京町家を守ってほしい」と5,000万円が寄付されたことを契機にして、基金設置が決まり、新たな支援策としてセンターに「京町家まちづくりファンド」が設立されました。京都市や国からの助成[＊2]、全国の個人や企業の寄付も含めて、2007年2月末で、総額が約1億7千万円になっています。このファンドの設立によって、今までの情報発信や相談事業に、更に資金面の助成を加えて、個々の町家を目に見えるかたちで支援し、ネットワークの関係者が、積極的、かつ具体的にかかわることができるようなったことは画期的なことです。2006年度から2年間は、特にファンドの設立趣旨や役割を内外に広く理解してもらえるよう、景観形成、文化発信、地域まちづくり活動の視点から見て、効果的でリーディングケースとなる物件をモデル事業として選定し、外観等の改修助成を行っています。単に外観だけではなく、改修後どのように使われるか、また、町家を継承していく人々の心意気も選定の条件となっています。モデル事業の1つとして、西陣のアートギャラリー「be京都」が改修を終え、2007年2月にオープンしました。何世代にもわたって受け継がれてきた町家を、団塊の世代向けの旅行企画会社である「ステーション」が、事務所兼ギャラリーに改修したものです。京都の文化を全国に発信する企画事業の拠点として利用されていくことが期待されます。トタン板でふさがれていたファサードは、本来の土壁、板張り、木製格子、木枠ガラス戸に改められ、見違えるように再生しました。

京町家という結晶に込められた意味や価値は、重々無尽にあらゆるものとかかわっています。それぞれの意味をひもとき、価値を一人ひとりが確認することにもっと長い時間をかけ、慎重な態度で臨む必要があると思います。このことを肝に銘じ、京町家の保全・再生にかかわっていかなければならないと思っています。✽

［＊1］京町家をSPC（特定目的会社）が買い取り、買い取りにあたっては投資家から資金を投資してもらい、衣料店や飲食店等の商業施設に改装して貸し出し、賃料収入を配当に当てる仕組み。2006年に京都不動産顧問業協会のメンバーが実施した

［＊2］国土交通省の外郭団体である民間都市開発推進機構の市民参加型まちづくりファンドによる助成を受けている

景観整備機構業務としての新たな京町家保全・再生支援事業の設立
（平成17年9月30日京町家まちづくりファンドを設立）



京町家まちづくりファンド事業のしくみ

be京都 改修後

町家倶楽部の活動

小針 剛
TAKESHI KOHARI

こはり・たけし――フリーカメラマン／1958年生まれ。個人撮影から古典芸能撮影、記録写真、出版物まで多岐にわたって展開中。オーストリア・ウィーン、ドイツ・シュツットガルトで作品展を開催。

はじめに

西陣の歴史は、都が移された時に始まった織物の町そのもので、市内北西部にある小さなエリアだが、西陣織の伝統を守りつつ、一方では変貌も余儀なくされてきた町である。

一方、町家は京都市中心部だけで28,000軒ほど残っていた。それに対し、行政側は10年くらい前までは「町家は20世紀の負の遺産」という見解だった。「古い木造住宅が多く残っていると土地開発も含めて京都の産業発展の妨げになる」という見方だった。そのうち、現在、京都市内の中心部だけでも2,500軒余りの空き家がある。しかし、それは、過疎としての空家ではなく、逆に“持ち主が空き家を持っている”だけの意味である。空いた理由はさまざまだが、よく言われるバブル崩壊後の伝統産業の衰退ではない。持ち主は家賃収入で生活しているわけではないからである。

20坪ほどの町家に、今もお年寄りは5,000〜10,000円の家賃で住んでいる。なぜそんな安いのか。それは伝統産業はすべてが分業独立制による発注だったため、良い職人には家を建てて住まわせた。「家賃はタダ同然でよい。その代わり良いものをつくってほしい」という考え方だった。つまり、家が人をつなぐツールになって“町”がつくられていた。そして今、町の中心部には“つくる人”が少なくなった。更に跡継ぎ問題も起きてきた。職人を引退しても、今までの付き合い上、「そのまま住んでいてよい」ことになる。しかし持ち主は、借家人に家のメンテナンスも任せていたため、残されたお年寄りが他に引き取られたり、亡くなったりすると、メンテナンスの行き届いていない町家が残ることになる。それが職人の町・西陣の実態である。

小針自邸

町家倶楽部設立の経緯

私の個人的な問題になるが、23年前に、京都好きが高じて移り住み、マンションで暮らしていた。そして家庭を持ち、子どもがやがて物心つくまでに成長した頃、心境に変化があった。「もっと手間の掛かる生活がしたい。家族間の思い出や実感を大事にしたい。そのためにあえて、古いスタイルの生活にこだわりたい」と思うようになった。そして11年前に明治の中頃に建てられた町家を借り、家族で改修しながら住み始めた。その時、声を掛けてくれたのが、今、町家倶楽部ネットワーク（以下、町家倶楽部）の代表をしている僧侶の佐野充照さんだった。「西陣は、もともと生活しながらものをつくって商いをしていたエリアだから、芸術家向きの転用には向いている。西陣で暮らしてみたらどうか」と薦めてくれた。しかし、いざ探し始めると、2ヵ月間で2,000〜3,000軒を歩き回って、空き家に辿り着いたのは100軒ほどだった。しかも、ことごとく断られ、最終的に話を聞いてくれたのは3軒だった。「私は手間の掛かる生活がしたい。それと本業のカメラマンとしての仕事場を兼ねた生活と仕事が共有できるライフスタイルを望んでいる。その応援も含めて貸してほしい」というお願いをした。それで、OKをもらったのが今の家である。

そんな話を新聞社が小さな記事にしてくれたが、その反響はすごかった。1日に60本もの電話が1週間鳴り響いた。「なんでそんな物好きなことをするのか」、「お宅をいっぺん見たい」という野次馬的な問い合わせも多かったが、多くは「実は私も借りたい。どこに行ったら情報が得られるか」、「他にも空いている家を知らないか」という内容がほとんどを占めた。そこで、そういう人たちに集まってもらい、自分の体験談を話したところ、3ヵ月目には2軒目、3軒目が決まった。その後、代表の佐野さんと一緒にいろんな情報をもらいながら、3年間で約30軒の間を取り持ったことになる。

また、それを見ていた地元の人たちが、いろいろと相談に来るようになった。それに対し「自分の家と思って大事にする」という条件で貸すことを基本に、「マンション並みの家賃設定で貸してはどうか」とアドバイスした。それで何軒かが成立したが、そのほとんどがアーティストだった。彼らは仕事柄、直したりつくったりするアイデアに長け、また、労力、時間も比較的ある。その上、看板を背負っていることもあって、信用を得やすかった。そのうち、今度は借り手、持ち主の両方から相談を受けるようになった。これが町家倶楽部設立の経緯である。

町家倶楽部の活動

町家倶楽部は「楽しく住まう」、「楽しく生きていく」をキーワードに、何でも相談にのっている。しかし一番多いのはもちろん町家の貸し借りで、「お見合い」というシステムをとっている。借り手が町家倶楽部の紹介を受け、気に入った場合は自己紹介文を書いてもらい、家主に提示する。その内容を見て、問題があれば、顔を合わすことなく断っていい。内諾すれば、初めて家を見せながら具体的な話をする手順のため、家主も安心できるようだ。この10年間で、約180軒の契約が成立している。

「SOHO支援町家 藤森寮」内部

同正面外観

また、借り手のアーティストたちが合同展覧会をしたり、最近ではアトリエを公開して町を歩きながら見て回るイベントも実施している。実は、ニューヨークで似たようなことを、我々より20年くらい前からしている町があった。その町、ピークスキル（Peekskill）市と8年前からアーティストの交換、交流会をしている。ニューヨークからアーティストが西陣に住み込んで創作活動をし、またその逆のケースもある。今、いろいろな可能性を模索している最中である。

町家倶楽部は今では「お見合い」だけではなく、「改築・改修」から「新築」、そして「安全なお年寄りの一人暮らし」に至るまで、相談内容は多岐にわたっている。その対応は可能であるが、しかし、我々のスタンスは町家の「保存」、「活用」、「活性化」のために活動をやっているのではないことである。町づくりで一番多いのが、人の行為を“手段”に見ることだが、我々はあくまでも“人のライフスタイルを主に考え、その町家での生活が楽しめるかどうか”にあると思っている。確かに、年間、各人が100万円近い家賃を支払ったとして、100軒あれば相当の金額になり、生活費も含めれば、経済面で地元にかなり貢献していると思う。しかし、我々はこれを目的にやっているわけではない。

町家倶楽部は、運営にあたって、報酬は求めていない。組織として存続させるための努力は必要がないからである。我々のキーワードは「大切にすること」、「つなげること」である。今までもこれからも、それに変わりはない。✱

西陣周辺

《京町家を活かすまちづくり》コラム

伝統文化祭 西陣・千両ヶ辻

南 進一郎
SHIN'ICHIRO MINAMI

みなみ・しんいちろう――東京友禅作家／田中種水に師事。その後、京都で独立。エルメス社日本文様研修指導。現在、京都そめ塾主宰、京町家再生工房代表。

NISHIJIN

「伝統文化祭 西陣千両ヶ辻」を始めたきっかけは、地元の電力会社から電線の地中埋設の話が出た時に、住民同士で「この町内はこれでいいのか」という話をしたことでした。この地域には西陣織の関係者が集まっているため、ずっとライバル関係が続いてきた感が強く、ほとんど話をすることはありませんでした。しかし実際に話してみると、みんなこの地域をとても大事にしていることが分かり、お互いに信頼関係が生まれてきました。

千両ヶ辻では、西陣織の産業が栄え、1日に千両の商いがあるほど活気があったことから、江戸時代にこの名前がついたそうです。ところが現在はいま一つ元気がない状態になっていましたので、かつての千両ヶ辻のような活気を取り戻そうという思いから、祭りを開くことを考えました。

基本的には「自分たちが楽しまないと人を喜ばすこともできない」と思っています。従って、自分たちには何ができるのか、まず自分たちが遊べるということはどういうことかを考えました。ありがたいことに、この地域には昔からの文化がゴロゴロしています。町内に晴明神社という神社があり、夢枕獏さんがこの神社ゆかりの安部晴明を主人公に、『陰陽師』という小説を書いたことでも有名です。とにかく漫画や映画になるなど、高い人気を集めている神社です。その祭りが毎年9月23日に行われ、人も多く集まることから、この日に合わせて祭りをすることになりました。

私は、事務局という立場でかかわっていますが、実行委員長は町内で270年以上続いている大店の社長・木村卯兵衛さん、また副委員長には写真家の水野克比古さんにお願いしています。経済人と文化人を要にして、バランスとしてはとても良かったと思います。

またこの企画は、“行政とは一切組まない”というかたちでやっております。誰かがスポンサーになったり、上からものを言われるとしらけてしまいますし、本来の祭りの意味が変わってしまいます。従って、「自分たちでできる範囲の手づくりの祭りにしよう」ということで、3,000円の会費と“お酒を出さない”という取り決めをしました。後は各自の責任でやっていただいています。

朝10時から夕方5時までの1日だけの祭りですが、2006年は大体27軒が参加して町屋の公開をしました。商売をしている町家はいつも見ることができますが、一般の住民の方たちには、自分たちがプライドを持っている家を見てほしいという思いから参加していただき、本格的な町家を見られる貴重な機会になりました。また、それぞれの家が代々持っている屏風など、コレクションの展示なども行いました。

去年、祭りにいらした方は6,500人ぐらいでしたが、毎年、賑やかさを増しています。お家を見学したり、買い物をしていただいたり、町をブラブラしていただいています。お年寄りの方にとっては、楽しく遊べて懐かしいと感じられたようですし、若い方にとっては町家の見学などが新鮮に感じられたようです。同志社大学の学生さんによるアンケート調査でも「町家見学が良かった」という意見が一番多かったそうです。観光の方も増え、「来年もやってほしい」、「2日ぐらいに延ばしてほしい」などという要望も出ています。また、「千両ヶ辻から範囲を広げたらどうか」という意見もあります。しかし、規模を大きくしてしまうと目が行き届かなくなりますし、何よりも“自分たちが手づくりで楽しみながら遊ぶ祭り”というコンセプトを基本にしております。それを、このまま気楽に続けていきたいと思っております。

この祭りをやったことで住民同士の会話が増え、コミュニケーションがスムーズにとれるようになってきました。町の元気を取り戻しただけでなく、自分たちの町を大事にしていることがお互いに分かり、外部の方へ“元気”をアピールすることもできるなど、「伝統文化祭 西陣千両ヶ辻」がもたらしたメリットは多々あったと感じています。✽

屏風の展示に見入っている人々

公開された染色工房

《京町家を活かすまちづくり》コラム

京町家再生と空間創生術

野村正樹
MASAKI NOMURA

のむら・まさき――ローバー都市建築事務所 代表取締役／1970年生まれ。1993年、同志社大学法学部卒業。1995年、京都工芸繊維大学造形工学科卒業。1995～99年、NEO建築事務所。2000年、Rover都市建築事務所設立。2001年、（財）京都市景観・まちづくりセンター京町家専門相談員。2002年、京都造形芸術大学建築デザインコース非常勤講師。2004年、リストワール不動産設立。2005年、京都工芸繊維大学大学院建築設計学専攻博士前期課程修了、有限責任事業組合CRA（総合法律研究会）設立。2006年から現職、大阪市住宅転用コーディネーター。

NISHIJIN

時代を超えて受け継がれた先人の知恵が、この町・西陣には息づいている。そんな想いを抱きながら、生まれ育った西陣を中心に京町家の再生に日々取り組んでいる。

通常、代表的な京町屋は、一般的に「表屋造」というスタイルで建てられている。前面に配された“みせ”と呼ばれる商業・応接スペースと、“おく”と呼ばれる居住スペースを内部の坪庭で分節し、かつ、通り庭という吹抜け空間で有機的に各居室を結合することにより、通風や採光を確保する工夫がなされている。こうした、自然を積極的に感じる空間には、寒暖や雨風・光のコントラストを巧みに取り入れながら、気持良く生活するための人々の知恵の重なりが蓄積されている。また、光の変化や植栽の変化といった、自然との豊かなかかわりを常に感じながら、西陣織や京友禅の美しい色・柄などを創造する美意識が培われてきたともいわれている。これに対し、西陣地域の職住共存の都市空間「織家建」は、「表屋造」とは対照的に、“みせ”の間である工場スペースを通りから奥に、“おく”である居住スペースを前面に配しているのが特徴的である。通常“みせ”は通りに面するものであるが、織機の音が近隣や道路通行人の迷惑にならないようにといった町衆の配慮から、「織家建」が考案されたのである。

西陣地域の町家再生の人気の一つとして、この織機の置かれていた“おく”の工場スペースを自由に利用できるといった魅力がある。小さいものは5坪ぐらいから、大きいものは40坪ぐらいまで、以前ジャガード機を置くために定義された、高天井の大きな木造無柱空間は、現代において、その多様性から創作活動をする若者を中心に人気を集めている。最近まで眠っていた、都市のストック資産としての工場スペース。必要なインフラとアイデアを挿入することにより、西陣地域の活性化の一助を担うまでになった。

私自身、アトリエを“おく”に構えているが、先人の知恵に学ぶことは多い。弊社のアトリエ改装を例に挙げて、具体的に説明してみたい。まず、改修計画を立てるにあたり、避けては通れないのが構造面の考察である。一般的に町家は老朽化が進んでおり、平面計画と連動させて耐震補強計画を進める必要がある。今回の改装では、無柱吹抜け空間に3ヵ所の耐震フレームを挿入し、主に桁行方向の構造を補強する方策を試みた。また、改修計画を立てるにあたり、現行の建築基準法の枠組みの中で、適正に処理する必要がある。細部にわたる建築関連法規の理解は不可欠といってよいであろう。京町家に多く見られる弁柄格子や瓦屋根、虫籠窓といった要素をうまく活かすことも、京町家の再生を考える上では重要となる。多くの場合、従来のリフォームにより、京町家本来の要素は隠されたり撤去されていることが多い。それをうまく見つけ出し、現在的に引き出すこともポイントとなる。今回の場合は漆喰壁に着目し、空間を彩る無地のキャンバスとして再定義するとにより、現代的に意味付けを行っている。そんな改修を施した織工場スペースは、今では現代において忘れられている、大事な“こころ”を再発見するスペースとなっている。

1,200年の歴史を育む町・京都には、先人の知恵を次代へつなぐ伝統の技が醸成されている。西陣地域における京町家再生への取り組みも、変化のようでありながら、次代へ受け継ぐ私たちのDNAなのである。すなわち、その時代の人や文化に合わせて、スタイルは常に改良され、それが伝統を継承していく。伝統とは変化をつなぎ続けることに他ならないのである。現在のスタイルに合わせて、“古い殻”の中から“新しい仕組み”を創造する町衆の叡智。そして人と“こころ”が暮らし合う。形を守るだけでなく、時代に生きた人が日々知恵を絞る。時の流れに合わせた変化を、積み重ねて、次代へ継承し続けるということこそが伝統であるといえるのではないだろうか。✽

「織成館」準棟纂冪

ローバー都市建築事務所オフィス

Show 商空間

綾綺殿

改修：田原工務店

ほっこりした空気

浅原貴美子
KIMIKO ASAHARA

「綾綺殿とはどういう意味ですか」というお尋ねをよく受けます。

「今から1200年前、平安京内裏殿舎の一つで女楽人が琵琶、箏などを演奏し妓女が舞っていたという所が「綾綺殿」。まさにこの場所が雅な歴史の舞台だったことを知り、そのお名前をお借りしようと思いました」。

これが、カフェ＆ショップ「綾綺殿」の由来である。店構えは軒の低い町家。しかし、一歩店内に入ると「ほう…」と新しい発見に表情を和ませる。一気に吹抜けた空間、正面には古い“おくどさん”。それらを見回しながらお訪ね下さった方は、一様に落ち着くと言って帰られる。

「ここは、築100年の昔ながらの町家で、幸いなことに、ほとんど手を加えられていませんでした。長い間、お米屋さんとして使われていましたが、空家になった時に、人手に渡ったら100年続いたこの雰囲気はなくなるかもしれない。由緒ある地にこんなに面白い、こんな空間が残っていたことを知り、思いを込めて、カフェ＆ショップを立ち上げました。あるがままの町家を、紅殻、荏胡麻油、渋柿などの自然塗料を使い、昔ながらの伝統工法で改修して…」。

ここには木と土と風の通る道がある。この自然な空気の中でゆっくりくつろいでいただく。花背から届く沸き水を釜で湧かし、コーヒーをたてる。おくどさんを焚いた暖かさは温もりが違うのである。

「古いものを活かすとか、特別の使命感はないんです。ここに住む人々が大切にしてきた空気を静かに守っていれば、どんな年代の人もほっこりできる…。これはぜひ次の世代にも伝えていってあげたいですね」。✽（談）

あさはら・きみこ――綾綺殿 店長／築200年の老舗油商家に生まれ、育ち、遊び、そして今そこで家業を切り盛りする。

Show 商空間

上――通り庭 エントランス方向を見る。右は“おくどさん”
中――店内
下――正面外観

《京町家を活かすまちづくり》コラム

京の町家学生設計コンペティション

若林広幸
HIROYUKI WAKABAYASHI

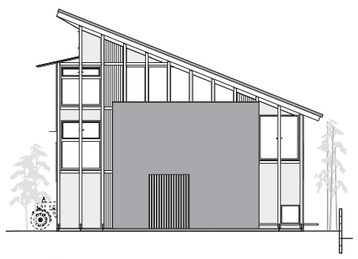
わかばやし・ひろゆき――若林広幸建築研究所 代表取締役／1949年生まれ。1967年、たち吉入社。商品開発・企画デザイナーとして、同社のホームエージェンシー京都デザインに編入社。1972年、独立。1982年、若林広幸建築研究所設立。
主な作品：ライフ・イン京都（1986）、京つけもの西利（1990）、ヒューマックスパビリオン渋谷（1992）、オムロン御殿場リゾートセンタ La La GOTENBA（1993）、南海空港特急ラピート（1994）、京阪宇治駅（1995）、毎日新聞京都支局（1999）、千種町総合福祉施設エーガイヤちぐさ（2001）、パシフィックスクエア 宮益坂上（2007）など。

「京の町家学生設計コンペティション」は、建築を学ぶ学生を対象に始められた設計競技である。2001年4月に第1回目が実施されて以降、現在までに計4回の設計競技が行われてきた。主催するのは、建築に関連するさまざまな職業に就いている人たちで構成される京都建築青年経済協議会である。この設計競技は、ある大学の先生から京都建築青年経済協議会に、「学生に木造建築の現場を見せてもらえないか」という相談が持ち込まれたのがきっかけである。大学では木造建築を教えているところは少なく、一方で木造に関心を持つ学生が増えてきていることも理由の一つであった。その協議会の事務局長・松永賢治氏から「建売住宅を学生の案で建てる設計競技ができないか」との相談を持ち掛けられた。コンペの最優秀案は実際に建築されるという、学生にとって処女作をつくる、またとないチャンスでもある。京都で行われる設計競技であり、学生に感心を持ってもらうということも踏まえ、日々姿を消しつつある町家をテーマに、“新しい京町家の提案を行う学生コンペティション”ということで企画はまとまった。そして審査委員長は私が務め、設計から申請、現場監理、竣工に至るまで、私の事務所が指導・監修していくというかたちでスタートすることとなった。ここ数年、京都の町家に対する関心の高まりは異常ともいえるブームになっている。そんな中、京都の景観論争が再燃している。市が実施しようとしているダウンゾーニング［＊］の是非が問われているのだ。高さ規制が強化される上に、さまざまな形態規制も課せられようとしている。しかし規制にほとんど抵触しない規模の建売りと呼ばれる住宅が町並みに大きくかかわっており、景観を破壊し続けていることは更に重大な問題なのである。建売住宅の多くが屋根の妻側を道路に向け、思い思いのデザインで建てているからだ。個を主張したファサードが道路に面して百花錯乱する結果となり、町並みの統一感を著しく損ねているのである。京の町並みの美しさは、平入りという個を抑えた形態の建物が連続するところにある。今回のコンペの条件は、そういった建売住宅に対する批評の意味も込め、“いぶし瓦を載せた勾配屋根の平入り”という、デザインをするにあたって厳しく制約されたものとした。その他、木造の3階建てであること、ガレージは必ず1台分設けること、オール電化であることなど、伝統的な町家にはなかった条件をどのようにうまく取り入れ、新しい提案がなされるかに期待を寄せた。当初、応募が30点も集まれば上出来だと考えていたのだが、反響は意外と大きく、予想をはるかに上回る318点の登録があり、応募の実数は160点にもなった。

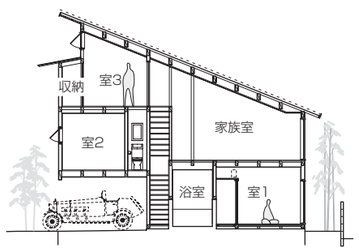
第1回の最優秀作品賞は、大阪工業大学大学院グループの提案した「トオリニワ」と名付けられた作品であった。この作品は3つの棟が路地状の通り庭で結ばれており、それぞれの棟が所有するこの路地を、お互いに共有する中間領域として活用しようとする案であった。屋根は3棟それぞれが片流れにはなっているが、全体として切り妻、平入りの大屋根を構成しており、隣地の寺の境内からの借景としても有効なものであった。また、外観の意匠では木組みの持つ美しさがうまく生かされており、最優秀賞を与える上での大きな要素であった。しかし準耐火構造の木造として、耐火被覆の問題をクリアする必要があり、この木組みの意匠を、主体構造以外の吊り戸用補助材とすることで原案に近いものを完成させることができた。

4回の設計競技を通してプランに共通する要素があることに気が付いた。それは、おのおのの住戸のプライバシーを強固にするのではなく、むしろ中間領域とも呼べる曖昧な空間を設けようとしていることである。現代の若者たちが、失われつつある気配や場の共有を、無意識のうちに渇望しているように思えてならない。✽

［＊］一定地域を対象に建築物の高さや指定容積率を引き下げ、無秩序な開発の規制を図る制度。一方で、住宅併用のオフィスビル建設など優良な開発計画に対しては元の容積率や緩和した容積率を認め、地域の改善を誘導しようとする



C棟立面図



C棟断面図

暮らしをデザインする

トオリニワ

設計：代表者 石川友博
（当時、大阪工業大学大学院 M-1）

平成の京町家

土屋孝雄
TAKAO TSUCHIYA

ここは西陣の東端に当たるが、当地に移り住んで100年というような人が珍しくもない古い地域である。あこがれというと大げさだが、そういう町に、しかも京町家に住んでみたいと漠然と思っていた。そして、いざ具体的に家探しを始めてみると、住むためにはそれなりに手を掛ける必要があり、換算すると新築を購入するのとあまり変わりがないことも分かった。一番のネックは融資面だった。当時は古い町家を直すことに関しては対象外だったのである。

そんな時に“京町家学生コンペ”を知った。聞けば“京都の町家の新しいスタイルの提案”をテーマにしたコンペで、学生さんが設計していることも分かり、新鮮で面白いと興味を持った。詳細をみると、家族みんなで団らんできる吹抜けのリビング、通り庭のような廊下、そしてオール電化された台所や、ヒノキの浴室…と、昔ながらの京町家の良さと現代的な利便さが巧みにミックスされており、そこにはあらゆる不安を吹き飛ばすほどの若々しい感覚が光っていた。蛇足だが、クーラーを取り付けたかったが、外観のデザインを壊すのではないかと、1年間は設置を我慢したほど、設計に関しては気に入っていた。

その学生さんとしばらくは、時々メールで連絡を取り合っていたが、一昨年、イタリアに留学していることを知った。現地のコンペで優勝し、日本に現存する処女作を取材したいというテレビ局の話が舞い込んできたからである。あの学生さんは今度はイタリアで何の設計を勝ち取ったのだろうか。我が家も遠い海の向こうで話題になっているのだろうか。✽

つちや・たかお――住人・会社員（50代）／40代に京都に移り住み、老舗（和菓子）に勤務。

上――リビング
右――通り庭のような廊下
下左――C棟（左）北面外観 右はB棟
下右――敷地を俯瞰する。手前右はA棟